映画監督ごあいさつ

大熊一夫（ジャーリスト）

　日本の精神病院には凡そ30万人が入院しています。その半分以上は、幽閉された状態です。自由意志や自己決定をはく奪されて、つまり、奴隷状態なのです。

新聞記者だった私は48年前に、アルコール依存症を装って精神病院に潜入し、『ルポ・精神病棟』を新聞に連載しました。その単行本は30万部も売れました。しかしながら、日本の監獄型治療装置群はびくともしません。

これが60年以上も昔の事なら、世界の国々の精神保健は、押しなべてこんな大収容主義でした。しかし、いまやこの種の人権はく奪型治療装置が有効でないことは、世界の常識です。

世界は変動しています。イタリアは1999年に県立精神病院のすべてを閉じました。2017年には、国立の司法精神病院さえ閉じました。今残るのは、５０００床たらずの私立精神病院と、各州に散った数百人分の保安施設だけです。

かつて約１２万人もの精神疾患の人が収容されていた精神病院が消えて、その１２万人が普通の市民に戻りました。それで何が起こったか。なーんにも起きません。

トリエステの町は精神病院を閉じて37年になります。精神病棟の代わりに地域精神保健サービス網を敷いて、精神疾患の人々を支えています。重い病気の人が、在宅で支えられているのです。

私は齢80歳の年金生活者ですが、“現代の奴隷”を置き去りにして、あの世とやらに旅立つわけには参りません。

繰り返しますが、日本の監獄型治療装置は恐ろしく野蛮です。時代遅れです。この事実を、多くの日本国民に知っていただきたいと思って、映画『精神病院のない社会』の作成を思いつきました。ドイツの映像大学の学生、西村きよしさんが、撮影に録音に、八面六臂の手助けをしてくれました。

80歳の手習いを、お笑いください。

２０１７・９・５